

## 都市をめぐる物語行為への視角

高橋 雅也 埼玉大学教育学部社会科教育講座

キーワード：都市、場所、物語行為

### 1. はじめに——都市の物語性

なにをもって「都市」と呼ぶか。この問いにたいしてアーバニズム論者が人口規模や密度、異質性の高さを指摘し、その環境下で営まれる都市的生活様式に焦点をあてるならば、筆者は「意味空間」としての飽和度の高さに着目して都市を定義したい。R.バルトは、人間の空間を「意味空間」と位置づけたうえで、「都市は一個の言説（ディスクール）であり、その言説は、まさしく一個の言語活動」（Barthes 1967=1988: 103）であるという。

これについて建造物を例にとって考えてみよう。同じ仕様の建造物でも、どこに立地するかで機能や価値がことなり、住民から喜ばれたり、疎まれたりする。また、商店街や住宅街を通り抜けたとき、個々の建物には還元できない全体的な雰囲気や印象を感じとることがある。これらは建造物の連なりがいわば「文脈」を形成し、同時に個々の建造物の意味がその「文脈」のもとで規定されていることの表れである。自然への人間の働きかけによってできた建造物は、「自然の時間-空間を文化の意味作用に変える役割を果たす記号装置」（石田 2003: 126）なのであり、都市にはそうした記号（およびその「意味」）が高密度で配置されている。まさに、建造環境としての「都市」にかんするかぎりでも、都市は人間的な「意味空間」なのであり、無数の文脈で構成された物語としての性格をもっている。

むろん、R.バルトのいう「意味空間」は記号の象徴作用を論じたメタファーである。しかし、「東京」などの固有名詞としての都市、あるいは都市的な生活経験や都市生活者としての自己像について語ったり、記述したりする実体的な営みは、上述のような意味空間としての都市がもつ物語性に条件づけられている。都市が生活者に物語行為をさそうのは、都市空間においては記号に媒介された意味が交差し、「出来事化」するからである<sup>(1)</sup>。吉見俊哉（1987）が都市の盛り場を「出来事」として分析し、集合的な雰囲気が生成するドラマトゥルギーを描いたように、物語には出来事が必要なのであり、都市がたんに記号が並立するテキストとして置かれたままでは、そこに物語は生まれない。

都市が物語行為をさそうもうひとつの要因は、都市に流通するコードの複数性である。記号と意味が飽和した「意味空間」としての都市には、記号と意味の対応関係を限定する複数のコードが存在している。都市生活者は選択的に、あるいは無意識的に特定のコードを取り入れて、思いおもしろい消費生活に明け暮れている。そして「都市の空気は自由にする」とばかりに、「自由で自律的な個人」へと自らを主体化している（つもりでいる）。しかしこのことは、都市の皮下で覇を競う権力の所在をおおい隠すと同時に、その潜勢力を増大させている。

それは個別の都市、都市的生活経験、都市生活者としての自己をいかに語るかという物語様式のドミナンスをめぐる権力作用にもあてはまる。具体的にいえば、「ニューヨークとはいかなる都

市中で、そこでの暮らしはどんなものであり、ニュー Yorker はかくあるべし」といった支配的かつ規範的な物語様式 (=語り口) が存在することは首肯できるだろう。都市には、そのようなドミナントストーリー (またはマスターナラティブ) が流通している。都市生活者はその物語を選択的に、あるいは無意識的に内面化しながら暮らし、都市について語る。それらは周囲に承認されやすくりスクの少ない物語行為であり、語り手にはことかかない。

しかし、そこで忘れてはならないのが、そうしたドミナンスが強固であればあるほど、「生のプロセスを介して浮き彫りにされる場所のナラティブ」(吉原 2006: 18) が異彩を放ち、支配的な語り口を相対化する力をもつということである。都市には「自由で自律的な個人」として主体化しようとするほど、結局は都市生活の作法を習得することに終始し、ドミナントストーリーに従属してしまうという「主体化=従属化」の陥穽が大きく口を開けている。けれども、この陥穽を回避しようとする反動もまた同様に大きく、生きられた経験の物語にこだわる語り手にもことかかないので、都市の物語行為はやむところがない。

ここまでみてきたとおり、都市は二つの「物語性」をもっている。第一に、都市には人びとの営みが累々と集積し、その所産が高い密度で配置されている。そこでは記号が意味と文脈をなし、出来事となって物語行為をうながす。第二に、都市には複数のコードが存在し、それを自由に選択する「主体化」へと都市は人びとをせきたて、ドミナントストーリーを不可視にする。しかし、その権力作用と反作用の双方が都市の物語行為をささるのである。

## 2. 物語の構文論——だれが、なにを、どこで語るか

### 2-1 何者として語るか——物語行為とアイデンティティ

いま何者を名乗って都市を語るのか。また、都市生活者のアイデンティティを明確にするために動員される「自己確証」の語りにおいて、都市という資源はいかなる位置を占めているのか。これらの問いが重要性を増しているが、それがグローバル化の進展や移動性の高まりによるシチズンシップの再編、ナショナル・アイデンティティの揺らぎを端緒としていることは明白である (Urry 2000=2006: 270, 276) <sup>(2)</sup>。

べつに都市について語らなくても、家族への愛情、自分の天職、人生の目標などを語ることでアイデンティティを獲得する経路もある。しかし、さまざまなアイデンティティ様式をつらぬく現代的な変容について、まず認識しなければならない。それは上野千鶴子が指摘しているとおり、いまや統合的なアイデンティティを論じる現実味は薄れており、それにもかかわらず、その現状を「『脱アイデンティティ的アイデンティティ』という一見論理矛盾にしか聞こえない用語」で説明するほかはなく、「『アイデンティティ』の用語なしでは記述できないという自己言及性のループ」(上野 2005: 296) のなかに、私たちがいるということである。

これまでアイデンティティの統合志向と居住の安定性 (=定住) は親和的で、ディアスポラやノマドと呼ばれる人びとのアイデンティティも、「定住者」にたいする「漂泊者」というかたちで対比的に規定されてきた。むろん、アイデンティティのゆらぎや「脱アイデンティティ」とはいつても、「移動の時代」に居住の安定性が著しく損なわれたとまではいえない。しかし、足元の場所=都市を語ることに事寄せて、自分が何者かを語ることは難しくなっている。都市という場所を資源にして自分が何者かを名乗る行為は、多くの場合、その場所に名づける行為 (都会、観光地、ふるさとなど) をともなうが、それと連動したアイデンティティ (都会人、旅人、離郷者など) は、多様

化した場所経験を語るさいの「主語」としては失効しつつある。

その場所で生まれたとか、働いているとか、そうした単純な場所経験ならば、その場所に名前(出生地、勤務地)をつけやすい。しかし、たとえばマカティの不動産に投資して、得た利益をインターネットでフクシマに寄附し、同志のシドニー在住慈善家とSNSでつながるといった華僑の場所経験においては、一連の場所にどう名づければいいのか。このように場所経験がグローバル化し、都市が名づけがたい場所になることで、特定の都市に紐づけられた「一人称」に固執して自分を語ることのリアリティが薄れていく。

都市という場所に「名づける行為」と自分を「名乗る行為」は表裏一体であり、名乗る目的で都市を語ることは、都市に名づけることと同義である。それはいまも基本的には妥当であって、洗練された都会人を標榜したければ、そこを都会と呼べばいいし、そこを都会と呼べば、あなたは都会人である。しかし、名づけがたい都市や複数の名をもつ都市が生まれ、また、ひとつの一人称(=統合的アイデンティティ)に満足しない人びとが増えることで、名づける行為と名乗る行為の等価性は失われつつある。

その意味では、都市が複数の名づけを許容するかぎり、その都市は人びとに中身のことなるIDカードを多重発行してくれることになる。そのような都市は、その場所で幾度も生き直すような経験にたいして開放的であり、脱アイデンティティの現代人が好む都市のすがたである。ただしいくつものIDの向こうには、いくつもの管理主体がひかえている。これは何者として都市を語ることをも許容するという、都市の間口の広さと引き換えのアポリアである<sup>(3)</sup>。

## 2-2 なにを語るか——出来事の生起をめぐって

なにを語るのかと問えば、それは「出来事」である。もとより都市の物語は、つぎつぎに生起する出来事の継起性に負うところがあり、それは「場所」に規定される。ふつう出来事は特定の場所を占めて生起し、当事者(の身体)はその場所において、べつの場所にはない。したがって、都市という物語行為の舞台が定まっていれば、語り手はそこで継起するスペクタクルの鑑賞者となり、それを語り起こすクロニクルの制作者になるわけである。

しかし、そのような出来事と場所の関係は変わりつつある。いまや物語行為における出来事の継起性よりも同時性が、そして時間的序列化よりも空間的序列化が重要になっている。たとえばシニフィアンとしての物語、シニフィエとしての出来事という観点からみれば、両者の関係は恣意的であり、その恣意的な「文化のコード」を場所の固有性と呼んでいるにすぎない(Saussure 1916=2007)。その恣意性を相対化し、「物語行為の共時態」へ同時代的で比較社会的なまなざしを向ける動きがみられはじめている。この世界規模のモニタリング／総覧型の物語行為は、高度にメディア化した現代社会で「生中継される出来事の消費を通して、ある意味で人は同時に二つの場所に居合わせることができる」(Scannell 1996: 172)という感覚から生じてくる。

CMC空間では、(サーバー容量は食うとしても)場所を占めない出来事、当事者(の身体)の居場所やポジショナリティを問わない出来事が起きている。そこでは、世界中の出来事の一覧性が身体の遍在(「神の目」)を実感させ、その反面、自分の半径10メートルの出来事が一瞬で世界に伝播していくさまは情報ソースの偏在を思わせる。いわば、「安楽椅子探偵」となった人びとにとって、そのような情報収集こそが「移動」なのである。

こうした場所感覚の倒錯は、どこで起きるとどんな出来事にも自分が口出しできると考える権利意識と、それとは裏腹に、なにを語るにもヒトゴトになってしまうという当事者意識の希薄さをもた

らす。モニタリング型の語り手は「出来事が、場所を選んで、生起する」という認識に必然性を見出せない「脱領域的」なコメンテーターとなり、ますます非場所的なナラティブに親しむようになるわけである。

### 2-3 どこで語るか——物語行為の足場

まず「ある場所に立ってなにを語るか」と「ある物語をどこで語るか」という二つの問題を区別しなければならない。前項で論じたのは、このうち前者の問題である。そこでは再帰的なモニタリングが徹底され、生起する出来事の同時性と一覽性が際立つなかで、足元の出来事を当事者が語るといったルールが失効していること、そしてヒトゴトを語りたがる脱領域的な物語行為には語るべきことの規範性がとぼしいことを論じた。

これをうけて本項では、後者の問題、すなわち「ある物語をどこで語るか」にかんする想起の次元を論じようと思う。こんにち、いかに場所と出来事の対応関係が相対化され、都市という場所が出来事の生起条件として必然性を欠くようになったとはいえ、やはり特定の場所には、人びとが出来事を「想起」し、それを語りたくなる蓋然性を高める力がある。

たとえば「ふるさととは遠きにありて思うもの」と詠うとき、重要なのはふるさとそのものではなく、ふるさとを想起させ、語らしめる「都市」という物語行為の足場である。いわゆる県人会などの都市の同郷団体は擬制的な親族関係を形成し、生活上の相互扶助を担ってきたが、いまやエスニックグループや労働者の階級的な集合性をも巻き込んで、国境を越える人的ネットワークを生み出すような空間編成の秩序を担いつつあるという（鯨坂 2005）。そこには、「出来事ではなく、語りか、場所を選ぶ」という感覚がみてとれるし、彼らが口にするのは移動の時代を生き抜く戦略的な物語なのである。

つぎに、戦争体験を例にして考えてみよう。かつて戦争について語ることは、橋川文三が固執した「戦争体験の伝達可能性」や「戦争体験に対する主体的な意味づけ」を重視する立場が支配的であり（野上 2006: 221）、もっぱら広島・長崎・沖縄から「だれが何を語るか」が注目されてきた。しかし、戦争の原体験にかんするテキストが出揃い、語りも再生産されるなかで、体験者自身も記憶の外延化としての「戦後」を生きている。それゆえ、こんにち戦争体験を語ることの焦点は、戦争の「伝達不可能性」を受け容れ、伝えようとするよりも「想起」の契機を適切な場所に埋め込むことへシフトしつつある。「想起」を託す相手は、日本人だけに限らない。たとえば、ドイツ的戦後の語りをもとめて日本の戦争遺跡を巡り歩いた、オランダ出身のジャーナリストである I. ブルマ（1994）のような人や実践にも開かれている。そうした戦争体験の語り方、聞き方というのは、ハイモビリティな場所経験に照応している。

ここにきて、R. ベラーのいう「記憶の共同体」は、ずっとその場所において出来事を覚えていることよりも、遠い場所を移動しながら思い出すという「想起の共同体」として、民族や国民国家の枠組みをこえて立ち現れているのである。

みてきたとおり、いまや都市という場所を何と名づけよう（「何者を自称しよう」と）自由であり、「遍在する身体」という非場所的な地点からヒトゴトを語れるようになったこと、また移動をしながら語る営みがさかんになるなかで、想起の契機を各所に埋め込むようにして語るという物語行為がみられだしている点を指摘した。それでは以下、都市をめぐるどのような物語様式（＝語り口）が存在するのかを検討していこう。

### 3. 物語様式のカテゴリー

#### 3-1 「都市的なるもの」の物語

都市社会学者の大谷信介が学生から「都市の定義」を募ったところ、「なにげなく創作された学生の定義が、L. ワースが都市的特徴として指摘した公的統制、時計、交通標識、物理的近接と社会的疎遠といった表現そのもの」だったという話は興味深い（大谷 2007: 183）。筆者は学生の考える「都市」が社会理論と合致していたことよりも、各人各様の「都市的なるもの」から、興味にあふれた都市の物語が語り起こされることを予感して、関心が尽きない。ここではそうした都市の物語様式について、類型化を試みてみようと思う。

第一に「資源の語り」である。上述の学生による定義を詳細にみていくと、都市にはコンビニがたくさんある、電車が一時間に何本ある、牛やトラクターが路上にないなど（これは都会と田舎の区別に近いが）、都市にあるもの／ないものにかんする説明が多い。これは、みずからの生活欲求の充足に必要（あるいは不要）な資源の過剰や不足にかんする状況認識からくる語り方であり、このような都市の描写・記述などは「資源の語り」と呼べるだろう。

しかし、そのような語り手の評価は、時間をおって変化する。場所への審美眼の変化である。これが第二の「美学の語り」であり、審美的な鑑賞のまなざしから都市をながめ、そこに美学的な価値判断をくわえる語り方である。ある者は摩天楼の輝きに「都市」をみるだろうし、ある者は雑踏の喧騒に無常の美をみるだろう。諸個人の目に映じる都市の美醜はすぐれて主観的なものであるが、都市を「外在する対象」として論評する点は「資源の語り」にも通じる。

これらにたいして、第三の「承認の語り」はより関係論的である。そこでは、都市は外在する論評の対象ではなく、語り手は都市に内在して働きかける主体である。人びとは選べない所与の社会関係と都市に特徴的な選択縁のなかで、集団間の小さな「移動」を繰り返していく。そこで周囲に受容されれば、ポジティブな承認の経験と集団への帰属意識を語り、逆に拒絶されれば、つらい排除の経験と集団への疎外感を語ることになる。

第四に「生成の語り」である。そのように緩なす社会関係のなかで、人びとはさまざまな財や価値を生みだし、獲得し、それらを失うこともある。いずれの生活者も、都市におけるあらゆる生殺与奪を、「都市」に委ねてみたり自分の方に引き寄せたりしながら暮らしている。こうした「生成と喪失」の物語は、語り手を饒舌にさせる。

そして、第五に「来歴の語り」である。都市の人為性や流動性が高まるほど、人びとはそれらの原点や起源をさがそうとする。そして、ルーツとの連続や断絶をみいだすことで、歴史的系譜のうえに過去・現在・未来を配置していく。それは同時に、自分自身とその営みの正統性や革新性にかんする語りとなる。これは現代人の歴史再帰的な性格をよくしめす語り口であり、次章でくわしく検討することにする。

さて、ここで筆者はひとつの補助線を引いてみたにすぎず、すべてのカテゴリーを網羅できたとは考えていないが、上述の物語様式には、これまで論じてきた都市のもつ物語性や物語行為をめぐる権力作用（またその変容）が色濃く反映されているのはたしかである。

#### 3-2 都市空間と資本描写

それでは、このような都市の物語様式（＝語り口）は、やはりカテゴリー間で覇を競い合い、ハイアラーキカルな序列をなしているのだろうか。

ド・セルトーによれば「物語は、いろいろな場所を選び分けては、また一緒にして結びつけている。場所をつかってさまざまな文を組みたて、『道』筋をつくりあげるのだ。物語は空間の遍歴である」(De Certeau 1980=1987: 239) という。ここでいう、物語が場所を組織化するという「空間の統辞論」的な性格は、移動の物語が加速するほどに強まる。すなわち(身体的であれ、想像上であれ)語り手が移動すると、そこで通過していく記号=場所言語が目まぐるしく物語の素材として取り込まれ、物語行為をとおして空間が再編成されるわけである。

身近な例から考えてみよう。たとえば、旅行の経験を語るときに、定番のルートをサイトからサイトへ(点から点へ)車で移動し、その場所で面的に広がる人びとの暮らしには目もくれずに観光を終えたとする。それはおそらく、商品化された記号をせっせと収集するような慌ただしい旅行だったにちがいないが、そうした場所経験から語り起こされる都市の相貌は、観光地形成の資本によって一筆書きされた「資本描写」による都市のすがたである。それはいわば異質な筆致を許容しない均質空間であって、ヴァナキュラーな価値が台無しであるように思える。

しかし、ここでまた問うことになる。都市の資本描写は、ことなる筆致とのあいだにハイアラーキカルな序列をなしているのだろうか。

筆者はそうは考えない。物語の語り口や都市の描写法は、画一的な序列ではなく、マルチレイヤーをなしているのである。大森荘蔵は「日常的描写と科学的描写は例外的な場合を除けば時間空間的に重なっている」としたうえで、「科学的描写は単に歴史的にのみならず認識的にも日常描写を基にして描かれている」(大森 1981: 242-3) という。これと同じで、欲望に働きかけてくる資本描写も、日常描写をすっかり塗りこめてしまうのではなく、「重ね描き」されるかたちで立ち現われるのである。さすがに私たちも、資本描写と(ないものねだりの)「資源の語り」を繰り返すことには食傷気味であるが、都市には余白がつねに残されているのである。まさしく都市空間は筆致のことなる描写をとところどころに留めながら立ち現われ、移動の物語をとおして幾度も再編成される。空間の統辞論としての物語は、都市の原動力といえるだろう。

それでは以下、後期近代としての現代社会に特徴的な再帰性が顕著にみられる「来歴の語り」を取り上げて検討したい。この物語様式は資本描写への反動として導かれる側面もあり、その点でも考察を深めてみたい。

## 4. 物語とモダニティ——「来歴の語り」と歴史再帰性

### 4-1 ノスタルジアと伝統

都市という場所に伝統をみいだし、浮遊する都市生活者としての自己の投錨点にする物語行為は一見ノスタルジックにはちがいない。これまでノスタルジアは「理想化された過去に、つまり歴史ではなくそこから毒気を抜いた」(Urry 1995=2003: 365) 対象への回帰志向や、懐古趣味として論じられ、すでに定式化された支配的な物語のヘゲモニーを補強するものとされてきた。

他方「結局のところ、場所のもつ安定感や親密性に照準/回帰」(吉原 2006: 18) し、日常を安定的な場所に停泊させようとする営みを「進歩的な場所感覚」(Massey 1993=2002) とよび、集合的な価値を新たに生成するものとして評価する向きもある。はたして、ノスタルジックな来歴の物語は、後ろ向きの実践にすぎないのだろうか。その古くて新しい価値の根拠を確かめずにはおけないだろう。

たとえば、足立重和(2004)は「ノスタルジック・セルフ」という概念を提起する。ノスタル

ジック・セルフとは、過去を引き受け、未来に投企する現存在であり、過去≒未来という非直線的な時間感覚をもち、昔を懐かしむ「繰り返しの生活のなかから出現する、価値づけられた感受性」を元手に「未来志向的で、創造的な方向」にむかう主体のことをさす（足立 2004: 52）。それは現在にたいして批判意識をもちながら、「過去にあったかもしれないが、未来に築くべきもの」（井之口 1977: 11）を模索する伝統の担い手である。

そうしたノスタルジック・セルフは、足立がフィールドとする「郡上おどり」の伝承において重要な役割を果たしている。伝統文化としての「郡上おどり」の正統性を語ることは、郡上八幡という小さな地方都市の「来歴の語り」にはほかならない。しかし、それは保守的であるどころか革新的であり、下火だったものを復活させた踊りに起こりがちな様式の均一化や固定化はなく、「即興性」や「偶然性」を取り込んだ持続可能な伝承のすがたをみせているという（足立 2004: 54）。ノスタルジック・セルフがつむぎだす語りは「懐かしさ」という安定感と親密性で自分たちを癒しながら、つねにここではないどこかへ向かおうとする未来志向によって、「保存のイデオロギー」から解放されているのである。いわば、伝統やノスタルジアが、いまをいまではないかのように、ここをここではないかのように経験させる枠組みになっており、そこから存在論的安心を調達すると同時に、変革可能性をつきつけるといった再帰性を宿している。

歴史学者の鹿島徹は、マッキンタイアやハイデガーを援用しながら、伝統とは、過去のおかげで現在もちうる未来への可能性を理解することであると定義する。こうした「伝来の諸可能性の引き受け（自己伝承）」という伝統概念に立脚してはじめて、過去から未来への「生の連関」にたいする投企の実践が、現存在を息づかせるのだという（鹿島 2006: 186, 200）。来歴の物語が人びとに提供する「家郷性」や「居心地のよさ」は、本来それらの価値にコミットできない異他的な存在による異化作用につねに晒されている（べき）ものである。それゆえ、伝統を受け継ぐ者は安閑としているばかりでなく、過去と対決し、応答していく態度がもとめられる。そうすることで担保される伝統の「生動性」こそが、一部の人のための「来歴の語り」を真に公共的な実践にするのである<sup>(4)</sup>。

こうしてみると、こんにち謳われる「場所への回帰」はたんなる懐古趣味ではなく、異他的な存在をも包摂する「来歴の語り」と、その公共的な価値を主張するに値する「伝統」を足元の場所にみつけようとする切実な実践といえるのではないだろうか。

#### 4-2 歴史空間の商品化

このように「来歴の語り」をとおして、物語行為における「歴史」の位置について考えると、語りがどれだけ社会的に構築され、事実こそくしているのかという問いを回避できないだろう。近年では、グローバル・ツーリズムの進展と文化遺産ブームもあって、都市の歴史空間としての商品化、またその歴史性を資源とする民俗文化などの商品化（「観光文化」化）がとみに加速している。このさき「歴史的なるもの」はどこへ向かい、私たちはそれを前にして一体なにを語るができるのだろうか。

たとえば建築史家の橋爪紳也は、全国でさかんにみられる歴史的環境の保存について、「かつての環境をそのまま保存、ないしは再現した『本物の街』であるはずなのに、その土地に暮らす人は、生活感がない『偽物の街』としか」それを評価せず、一方そこを訪れる観光客には「学習の場」でしかないというズレを問題視している（橋爪 2002: 68-9）。また歴史的環境は、住まう者と訪れる者の双方にとって、日常の生活空間を相対化する契機となる「参照する環境」であれば十分で

あり、矛盾と混乱、対比と競合をつまびらかに表現することが歴史都市の条件であると論じる（橋爪 2002: 74, 81）。

また同様に「歴史商品」の代表例である都市祝祭などをみても、そこには先述のような意味での「伝統」の担い手がおり、歴史表象にたいする確信と懐疑が同居した解釈可能性を追求する人びとが数多く存在している（高橋 2003）。成田龍一（2007: 51）が指摘するとおり、「社会集団の来歴」譚は人びとに「われわれ」感情を喚起し、実質的な生の「共同の場」をうむものであるにはちがいない。ただし、こんにちの都市祝祭のように、多様な解釈可能性を担保した「来歴の語り」は、それを共有するナラティブ・コミュニティ（＝物語の共同体）を閉鎖的にはしない。踊りや囃子のように、マレビト＝異他的なるものへの開放性をもった身体実践と、これを胚胎してきた「場所」にひかれて人びとは歴史や伝統にコミットするのである。

このように歴史都市の真正性は、いまや新たな位相にある。生活空間の日常性から紡がれる来歴の語りは、定式化され、商品化されるたびに異化されて、テキストとして観光客という解釈者の前に差し出される。歴史との切実な戯れをする語り手にとって、資本の論理（「資本描写」の都市）のもとで商品化された歴史を横目でみやりながら、まつりを見物にきた人びとの前で踊るとき、すなわち歴史の物語を聞きにきた人びとの前で「語る」ときの緊張感こそが、物語行為の愉楽になっているのである。いいかえれば、語りの構築性をすどく自覚しながらも、その虚実や真正性にはいたずらに固執せず、語りへのシンセリティを模索する語り手がおり、彼らの存在が、まさしく都市という場所に「ナラティブの噴出」（野口 2005: 212）状況を生じさせているというわけである。

#### 4-3 「歴史性」と脱／再埋め込み

A. ギデنزが「歴史を作るための歴史の使用」（Giddens 1991=2005: 19）として「歴史性」を定義するとき、それが都市という場所の物語を方向づけるのはいうまでもない。ただし、ここで大切なのは、（まちづくりのプランナーがしているように）利用可能な歴史的資源を家捜しすることではなく、「歴史のための歴史」という方法態度をもった、歴史再帰的な主体の所在を問題にすることなのである。

もとより、ギデنزが歴史性を論じるのは、ポスト伝統社会における伝統の意義をみさだめるためである。そのためには、伝統が「空間にたいしても特権的な見方を要求」し、そうして特権化された空間が「伝統的な信念や実践の示差的特徴を維持」し、伝統はそこに「つねにしっかりと根を張っている」と表現されるような伝統と場所の関係は、すでに変容しているということを検討しなければならない（Giddens 1994=1997: 152）。

すなわち、伝統の主要な担い手が先述のように投企的な「伝統」を追求するという再帰性をみせ、みずから「異他的なるもの」となって来歴の語りを異化している昨今では、伝統のもつ意味は、かつて論じられたようなウチ・ソト、中心－周縁の境界における儀礼的機能を超えている。伝統を担う語り手たちは再帰的自己という「内なる他者」の傍らで息をしているのであり、中心が周縁を包摂しているわけでも、その両者に引き裂かれているわけでもない。

それゆえ、伝統を語る足場は、政治的に公明正大な〈命題的真理〉をもとめる明白に公共的な領域にあるのではなく、いわば開くことと閉じることのあわい、伝統が埋め込まれていた文脈と伝統が再び埋め込まれる文脈とのほさまにある。したがって、「歴史性」に純粹さや真正さでは割り切れない部分があるのは当然である。歴史性とは制度的再帰性のひとつの形態であり、それに動機づけられて、人びとは自分や自分の行為にかんする記述的な知識（「専門的」な歴史学的スケール）

を取り入れる。そして、それを駆使して自己言及的に歴史を語ることで、未来の自分が立ち返る「参照点」をいまのうちから用意している、というわけである<sup>(5)</sup>。そのためにかかるコストについても、周到に計算済みなのが再帰的主体である。

こうしたハイパーモダンな「都市」で伝統を語ることは、開くのに疲れて閉じるような反動的な共同体形成を意味するのではなく、時間的自己／歴史的存在としての自意識を再帰的に獲得した人びとが、思いおもいの〈解釈学的真理〉をもちよって参照し合う「意味論的地平」を見晴らす営みなのである。

## 5. まとめ

本稿では、諸個人が都市や都市生活経験、そこに生き暮らす自己像について語ることを都市の物語行為として定位し、都市がもつ物語性を整理したうえで、都市の物語においては、だれが、なにを、どこで語るのかについて構文論を展開した。これをふまえて、都市の物語様式(=語り口)をカテゴライズし、そうした類型論とパラレルな都市の「描写」という考え方に言及した。ついで、多様な物語様式のなかでも、とくに「来歴の語り」と取り上げて、現代社会に特徴的な歴史再帰性と物語の関係について検討をおこなった。

これまで、都市という場所をめぐる議論は、都市を資本による空間形成の帰結として論じる立場と、「資本の論理」にたいして生きられた経験を本質主義的に重視する立場に二分され、撞着を内在させてきた。さらにいえば、どちらの立場も都市／地域のローカルな価値やコミュニティの意義については認めるものの、その考え方は大きくことなる。前者の立場は、商品経済で付加価値をうむ差異の生産という意味でローカリティを称揚し、「市場の失敗」の安全装置としてコミュニティを評価する。他方、後者の立場は、アイデンティティの安定的な資源としてローカリティを擁護し、ときにノスタルジックな地縁再生への願望をコミュニティに重ねている。

まさしく都市をめぐる物語行為とは、都市空間が抱え込んでいるそうしたディレンマへの状況論的な応答にほかならない。都市の物語からみいだされる、資本描写と生活描写のあいだにある都市像は、たとえば多中心的なネットワーク、あるいは中心も始点も終点もないリゾーム的社会のあり方を示唆するものだとして筆者は考えている。そのような見通しが、本稿において示せたかといえたいへん心許ないが、これについてはひきつづき課題としたい。

### 注

- (1) 記号を介して意味が交差し、空間が出来事化する過程で「場所」が生成される。
- (2) 国家が国民にとって、最低限の身分保証をするだけの出入り自由な「回転扉」と化すことで、国家はもはや「全体社会」ではなくなり、統合の物語を語ることのリアリティが薄れつつある。
- (3) これが監視型社会の本質をなしていることは否めない。安全・安心をもとめる社会は、自分たちと同様に「都市」に受容されているはずの異質な他者を排除するモメントをはらんでいる。
- (4) その意味では、「新しい公共」といった議論においては、NPOなどの組織をベースとした市民社会が念頭におかれるケースが多いが、そこには歴史性をめぐる議論が必要であろう。
- (5) 現在、各地でさかんに「現在」を保存するタイプの文化遺産が表れているのはその証左である。

### 引用文献

足立重和, 2004, 「ノスタルジーを通じた伝統文化の継承—岐阜県郡上八幡町の郡上おどりの事例から」『環境社会学研究』10, 42-58.

- 鯨坂学, 2005, 『都市同郷団体の研究』法律文化社.
- Barthes, Roland, 1967, *L'aventure Sémiologique*, Paris: Seuil. (= 1988, 花輪光訳『記号学の冒険』みすず書房.)
- Buruma, Ian, 1994, *Wages of guilt: Memories of war in Germany and Japan*, Farrar, Straus, Giroux. (= 1994, 石井信平訳『戦争の記憶—日本人とドイツ人』TBSブリタニカ.)
- De Certeau, Michel, 1980, *Art de Faire*, Paris: Union Générale d'Édition. (= 1987, 山田登世子訳『日常の実践のポイエティック』国文社.)
- Giddens, Anthony, 1994, et al. eds., *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Cambridge: Polity. (= 1997, 松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳『再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理』而立書房.)
- , 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Blackwell. (= 2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- 橋爪紳也, 2002, 『集客都市—文化の「仕掛け」が人を呼ぶ』日本経済新聞社.
- 井之口章次, 1977, 『伝承と創造—民俗学の眼』弘文堂.
- 石田英敬, 2003, 『記号の知／メディアの知—日常生活批判のためのレッスン』東京大学出版会.
- 鹿島徹, 2006, 『可能性としての歴史—越境する物語り理論』岩波書店.
- Massey, Doreen, 1993, “Power-geometry and a progressive sense of place” Bird, James et al. eds., *Mapping the Future: Local Cultures, Global Changes*, London: Routledge. (= 2002, 加藤政洋訳「権力の幾何学と進歩的な場所感覚」『思想』933.)
- 成田龍一, 2007, 「書評・鹿島徹『可能性としての歴史』あるいは歴史学の可能性について」東京大学出版会『UP』414, 50-5.
- 野上元, 2006, 『戦争体験の社会学—「兵士」という文体』弘文堂.
- 野口裕二, 2005, 『ナラティブの臨床社会学』勁草書房.
- 大森荘蔵, 1981, 『流れとよどみ—哲学断章』産業図書.
- 大谷信介, 2007, 『「都市的なるもの」の社会学』ミネルヴァ書房.
- Saussure, Ferdinand de, 1916, *Troisième Cours de Linguistique Générale: d'après les Cahiers d'Emile Constantin*, Paris: Payot. (= 2007, 影浦峽・田中久美子訳『ソシュール一般言語学講義—コンスタンタンのノート』東京大学出版会.)
- Scannell, P., 1996, *Radio, Television and Modern Life*, London: Blackwell.
- 高橋雅也, 2003, 「新しい担い手による民俗文化の「復活」—郷土史と向き合う過程としての「語り」」『東北文化研究室紀要』44, 21-33.
- 上野千鶴子, 2005, 『脱アイデンティティ』勁草書房.
- Urry, John, 1995, *Consuming Places*, London: Routledge. (= 2003, 吉原直樹・大澤善信監訳『場所を消費する』法政大学出版局.)
- , 2000, *Sociology beyond Societies: Mobilities for the Twenty-first Century*, London: Routledge. (= 2006, 吉原直樹監訳『社会を越える社会学—移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版局.)
- 吉原直樹, 2006, 「ポストモダンとしての地域社会—『空間』と『場所』」新原道信・広田康生編『グローバル化／ポスト・モダンと地域社会』東信堂, 5-22.
- 吉見俊哉, 1987, 『都市のドラマトウロジー—東京・盛り場の社会史』弘文堂.